

ノンフィクションの本について①

2015 年 11 月 20 日

ヴィアックス児童部会

1. ノンフィクションとは

【ノンフィクション nonfiction】

・総合百科事典ポプラディア 8 新訂版 ポプラ社 2011

事実にもとづいて記録的に書いた作品。想像によってつくられる物語や小説を、フィクションというのに対することば。ルポルタージュ、自伝、伝記、回想録、記録、日記などがある。日本では、1970（昭和45）年に「大宅壮一ノンフィクション賞」が創設され、さまざまな形のノンフィクションが注目されるようになった。

・世界大百科事典 第2版 平凡社編 平凡社 2005

字義どおりにはフィクションではないもの、つまり小説、詩、戯曲を除くすべての著作物。日本やアメリカの書評紙ではベストセラーの一覧をフィクションとノンフィクションに分け、後者には健康促進、ペットの飼い方などの実用書まで含まれる。しかしより一般的には、事実に基づくルポルタージュ、ドキュメンタリー、旅行記、探検記、伝記、日記などの散文形式の作品を指す。ただし、この定義も包括的であり、ノンフィクションには批判精神が欠如しているとしてルポルタージュやドキュメンタリーをこれから除外する考え方もある。

—第4回の「基本図書から学ぶ」は、ノンフィクションの中から、特に自然科学・社会科学(知識絵本・写真絵本)分野から、よい絵本(全国学校図書館協議会)や子どもの本(日本児童図書出版協会)選定の資料を中心に、『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社 1996 を切り口として読み解く。

2. 『センス・オブ・ワンダー』を手がかりに

子どものときのある種の体験、それは何でもないような日常の一瞬であったり、とりたてて興味深い特別な事件でなかったり、にもかかわらず、その人に決定的なまでの影響を与え、その後の人生をも支え続ける、そんな出来事があるのではないか。

「地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。鳥の渡り、潮の満ち干、春を待つ蕾のなかには、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています。自然がくりかえすリフレイン——夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ——のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです。」

（『センス・オブ・ワンダー』より）

では、出来事と言葉を結びつけ、イメージ(想像力)を豊かに広げる、人として送り手と受け手というコミュニケーションを成立させ、面白さや驚きなど共感を互いに共有できる、**《センス・オブ・ワンダー》**とは？

- ◇澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力
- ◇神秘さや不思議さに目を見はる感性
- ◇さまざまな情緒やゆたかな感受性
- ◇対象となるものについてもっとよく知りたいと思う、見つけた知識

3. ノンフィクションの本について

—『ことばの贈りもの』松岡享子著 東京子ども図書館 2009 P51 より

「体験したことをことばで確認し、ことばで知っていることを体験で裏打ちするということ、それを私たちはくり返しくり返し、行っているのではないのでしょうか。いってみればことばと体験のあいだを常に往き来しているのが、私たちの生活なのではないのでしょうか。その往き来がよりよく行われる、すなわち自分のしていることをことばでしっかりとらえることができ、なおかつ、よいことばから得たもので自分の生活を導くことができれば、私たちの生活は—少なくとも精神生活は、質のよい豊かなものになっていくのではないかと思います。」

—『児童文学論』リリアンH. スミス著 岩波書店 1985 P332 より

「一般的に言って、子どもに知識を与える目的で本を書くのに、三つのやり方がある。ある著者は、子どもに知識を与えることだけを目的とする。また第二の著者は、知識を与えると同時に、その題材をわかりやすく説明する。さらに、第三の著者は（このような著者は、まれであるが）、知識を与え、説明するばかりでなく、それを文学作品に仕上げるのである。

すべての知識の本には、その本の意図をつらぬくために、欠くことのできない必須の原則がある。正確な知識、明確な説明、適切な表現、この三つのものが、すべての知識の本にあてはまる基礎的な普遍の原則である。この基本的な原則に加えて、内容が読者の理解範囲に適合しているかどうか、著者がその題材について読者の興味をひきおこす能力をもっているかどうか、また、題材の性格がそれを必要とするならば、図表や挿絵が内容を説明し、生かしているかを見る必要があるであろう。」

—石井桃子氏 100歳記念展のメッセージ

「本は 一生の友だち
本は友だち。一生の友だち。
子ども時代に友だちになる本、
そして大人になって友だちになる本。
本の友だちは一生その人と共にある。
こうして生涯話しあえる本と
出あえた人は、仕あわせである。」

4. ノンフィクションの評価の観点

『ノンフィクション子どもの本 900 冊』日本子どもの本研究会・ノンフィクション部会編 一声社 1987

- ①よく調べ、事実をどこまでも大事にしているか。《**事実性**》
- ②記録された事実は、子どもたちに興味や関心になっており、
子どもたちの成長にとって有意義な感動を与えるか。《**教育性**》
- ③表現や構成が巧みで、ていねいで、魅力的な文章や紙面となっているか。《**形象性**》

《参考文献》

『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 佑学社 1991

『ことばの贈りもの』松岡享子著 東京子ども図書館 2009

『児童文学論』リリアンH. スミス著 岩波書店 1985

『ノンフィクション子どもの本 900 冊』日本子どもの本研究会・ノンフィクション部会編 一声社 1987

『科学の本っておもしろい 子どもの世界を広げる 250 冊の本』科学読物研究会編 連合出版 1996